恒川遺跡群

恒川A地籍

飯田市座光寺市道26号線拡幅に伴う
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1993年3月

長野県飯田市教育委員会

恒川遺跡群

恒川A地籍

飯田市座光寺市道26号線拡幅に伴う
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1993年3月

長野県飯田市教育委員会

序

座光寺地区では、下段地帯の農業構造改善事業がほぼ終了しました。関連する事業として、国道153号バイパスから、構造改善された下段地帯に通ずる市道26号線の拡幅・移転新設がありました。

現地は、白山遺跡の範囲内のため発掘調査がなされ、調査報告書も発行されております。

今回の調査はその先線にあたり、国道153号バイパスに接する部分で行なわれたものです。その位置は、古代伊那郡衙址と推定される範囲の端部と判断されている恒川遺跡群恒川A地籍にあります。恒川A地籍は恒川遺跡群の中心にあたり、重要な埋蔵文化財包蔵地として認識されており、本来現状のままで後世に伝えるべきものではありますが、現代に生きる私達の住環境の整備も不可欠のものといえます。それにより、消滅してしまう地中に埋蔵された文化財を記録保存という姿で後世に伝えることは次善の策としてやむをえないものといえます。次善の策として残されたものが本書であり、本書に示されたこの歴史の事実が、皆様の古代を考える一助となれば幸いです。

終りに、調査実施にあたり様々なご協力をいただいた、関係者各位に心から感謝申し上げます。

平成5年3月

飯田市教育委員会

教育長　　小林　恭之助

例　　言

1．本書は飯田市座光寺市道26号線拡幅に伴う埋蔵文化財包蔵地恒川Ａ遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は飯田市建設部土木課との協議を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3．調査は、平成４年11月16日～24日に発掘を行ない、続いて平成４年度末まで整理作業及び報告書作成作業を行なった。

4．昭和53年の国道153号バイパス発掘調査時には、旧市道26号線の南北を恒川Ａ・Ｂ地籍としたが、今回の調査は恒川Ａで統一した。それにより、発掘調査及び整理作業においては一貫して遺跡略号ＧＯＡを用いた。

5．今次調査地点は一般国道153号座光寺バイパス路線内の恒川Ａ地籍調査と連続する遺構番号を付した。ただし、溝址15については、恒川Ｂ地籍で検出されたものと連続する遺構と判断し、同一遺構名とした。

6．本報告書の記載については、時代順とした。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。

7．本書は、佐々木嘉和が執筆し、本文の一部について小林正春が加筆し、訂正を行った。

8．本書に記載された図面類の整理・遺物実測・写真撮影は佐々木があたった。

9．本書の編集は佐々木が行ない、小林が総括した。

10．本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕及び擦痕は図内に実線で、刃つぶし及び敲打痕は図外に破線で、節理面は斜線、ロー状光沢は網掛けで示した。

11．本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本 文 目 次

序
例　言
目　次
Ⅰ　経過
1　調査に至るまでの経過 …… 1
2　調査の経過 …… 1
3　調査組織 …… 1
Ⅱ　遺跡の環境 …… 5
1　自然環境 …… 5
2　歴史環境 …… 5
3　層序 …… 7
Ⅲ　調査結果 …… 12
1）古墳時代
①　溝址15 …… 12
2）奈良時代
①　11号住居址 …… 18
3）時期不明
①　穴等 …… 19
4）遺構外出土遺物 …… 19
Ⅳ　まとめ …… 20

挿 図 目 次

挿図1　調査遺跡及び周辺遺跡位置図 …… 3
挿図2　調査位置及び周辺地図 …… 4
挿図3　A区・B区（溝址15）土層図 …… 8
挿図4　調査区全体図 …… 10
挿図5　調査区遺構全体図 …… 11
挿図6　溝址15 …… 13
挿図7　溝址15確認位置図 …… 16

挿図8　11号住居址 …… 18

図 版 目 次

第1図　11号住居址・溝址15出土遺物 …… 22
第2図　溝址15出土遺物 …… 23
第3図　溝址15出土遺物 …… 24
第4図　溝址15出土遺物 …… 25
第5図　遺構外出土遺物 …… 26

写 真 図 版 目 次

図版1　調査前 …… 28
図版2　遺構分布状態 …… 29
図版3　遺物出土状態 …… 30
図版4　溝址15出土遺物 …… 31
図版5　溝址15出土遺物 …… 32
図版6　溝址15・11号住居址・遺構外出土遺物 …… 33
図版7　遺構外出土遺物 …… 34
図版8　調査スナップ …… 35

Ⅰ 経　過

1　調査に至るまでの経過

恒川Ａ地籍は、飯田市座光寺の下位段丘東端部に所在する。恒川Ａ地籍は、恒川遺跡群の一画をなし、その中核に位置づけられる。

昭和52年以来、一般国道153号座光寺バイパス建設に先立つ発掘調査が実施され、縄文時代から中世に至る多数の遺構・遺物が確認された。さらに、恒川遺跡は、以前より古代伊那郡衙址所在地と推定されており、調査結果は強くこれを裏づけるものであった。

バイパス建設に伴う緊急発掘の結果を受け、昭和57年度以後、飯田市教育委員会は国庫補助事業の重要遺跡範囲確認調査を継続実施しており、郡衙址の位置・規模・構成・変遷等諸問題を解明すべく成果を重ねている。

また、国道バイパス開通後、恒川遺跡群内において、諸開発が急速に進展しており、文化財保護の本旨からすれば次善の策ではあるが、緊急調査を実施し記録保存を図っている。

座光寺地区では、長年の懸案である下段地帯の構造改善事業が実施され、それに付随する市道26号線拡幅が具体的となり、平成４年３月11日長野県教育委員会・飯田市教育委員会・飯田市建設部それぞれの担当者によりその保護策について現地協議を行なった。

その結果、土地耕作者の了解が得られた11月から調査に着手することとなった。

2　調査の経過

諸協議の結果に基づいて、平成４年11月16日発掘調査に着手した。市道26号線の現道両側に調査区を設定し、耕土掘り下げから遺構の検出、同掘り下げまですべて人力により行なった。遺構検出後写真撮影・測量を行ない現地作業を終了した。

その後、平成５年３月末まで飯田市考古資料館において、現地で記録・保存した遺物・図面・写真類等の整理作業を行ない、当報告書作成作業にあたった。

3　調査組織

１）調査団

調査担当者　小林正春

調　査　員　佐々木嘉和　佐合英治　吉川　豊　馬場保之　渋谷恵美子

作　業　員　　池田幸子　今村春一　北原森作　北村重美　五味洋治　小池千津子
原田四郎八　吉川正実　福沢トシ子

整理作業員　　池田幸子　金井照子　金子裕子　唐沢古千代　唐沢さかえ　木下早苗
木下玲子　櫛原勝子　小池千津子　小平不二子　小林千枝　田中恵子
丹羽由美　萩原弘枝　林勢紀子　平栗陽子　福沢育子　福沢幸子
牧内喜久子　牧内とし子　牧内八代　松本恭子　三浦厚子　南井規子
宮内真理子　森　信子　森藤美知子　吉川悦子　吉川紀美子　吉沢まつ美

2）事務局

飯田市教育委員会社会教育課

安野　節　（社会教育課長）
原田　吉樹　（社会教育課文化係長）
小林　正春　（社会教育課文化係）
吉川　豊　（　〃　）
馬場　保之　（　〃　）
渋谷恵美子　（　〃　）
福澤　好晃　（　〃　）
篠田　恵　（社会教育課社会教育係）

1．恒川A遺跡　2．座光寺原遺跡　3．宮崎A遺跡　4．宮崎B遺跡　5．大門原B遺跡
6．大門原D遺跡　7．大久保遺跡　8．中島遺跡　9．恒川遺跡群　10．石行遺跡
A．新井原12号古墳　B．畦地1号古墳　C．高岡古墳群　D．新井原古墳群

挿図1　調査遺跡及び周辺遺跡位置図

挿図2　調査位置及び周辺地図

Ⅱ　遺跡の環境

1．自然環境

恒川遺跡群恒川Ａ地籍は、飯田市座光寺恒川地籍に所在する。

飯田市座光寺地区は飯田市街地の北東４㎞に位置し、南西を下伊那郡上郷町、北東を同高森町東南は天竜川を挟んで同喬木村に囲まれた、行政区画上飯田市の飛地にある。

飯田市は南アルプスと中央アルプスに挟まれた伊那谷の南端にあたり、両山地の間を天竜川が南流する。山地の形成に関わる断層運動に伴い、盆地、大きな段丘が形成され、それを天竜川に流入する河川が切断し、複雑な段丘地形を呈している。座光寺地区は中央アルプスの前山から、天竜川に至り、縦長の三角形に近い形をしている。

座光寺地区の地形上の特徴は、南北に延びる伊那谷の地形と方向を一致させて断層で形成された大きな段丘崖が南北に走り、上・中・下の段丘面及び天竜川氾濫原により構成され、それが西方から流下し天竜川に注ぐ小河川に切られ複雑な様相を呈している。それぞれの段丘面上には幾つかの小段丘があり、各段丘崖下には湧水がある。

調査区は、下位段丘面上の小段丘中央部にある。恒川遺跡群中の恒川清水の東方約50ｍにあり、それを源とする井水が北東側を通っている。北東は比高差0.8ｍ～1ｍとわずか高くなって地続で段丘面に続き、比高差のつく所に井水が通る。井水の横には市道26号線が通り、この市道26号線を拡幅する為に調査を行った。

2．歴史環境

座光寺地区の埋蔵文化財包蔵地は20余りあり、地区内にある遺跡の時期別分布は、上段地帯に縄文･弥生時代の遺跡があり、山寄りに縄文時代の濃度が増している。中央の段丘崖下に古墳、上に中世山城が位置し、下位段丘面には縄文時代から近世の遺跡が複合して分布している。

地区内には古墳が多く、埋蔵文化財包蔵地を含めて土器・石器も出土し、考古遺物に興味を持つ人も多い。記録が無いのではっきりしないが、江戸時代から明治時代にかけて古墳の遺物が取り出され、現在の削平された桑園に変化した様子である。

次の地区内の埋蔵文化財・古墳等の調査を概観する。

発掘調査の最初は、大正11年11月に現在の東日本鉄道飯田線にかかって調査された、新井原12号古墳(大塚)(注１)である。この頃鳥居龍蔵氏による遺物調査が行なわれている。

大正12年には畦地１号古墳の石室が、座光寺小学校職員と高等科生徒によって清掃調査され、

銀製の「垂飾付長鎖式耳飾」が発見されている。

その後、昭和30年代まで記録は無く破壊のみが進んでいたと思われる。

昭和37年(1962)には、前年の梅雨前線による集中豪雨(36災)の災害復旧工事用採土に先立ち、下伊那教育会歴史調査部によって、上段の一部座光寺原遺跡(注２)が調査され、弥生時代後期の標識「座光寺原式」が設立されている。

その後いくつかの発掘調査が行なわれ、昭和45年には中央自動車道建設に伴う発掘調査で座光寺地区では宮崎、大門原など５遺跡(注３)が調査された。

昭和50年(1975)には、農業構造改善事業に伴う道路部分の調査で、中島遺跡(注４)が座光寺考古学研究会・下伊那教育会考古学委員会によって調査され、弥生時代後期標識「中島式」の設定の元となった。

昭和51(1976)年度からは、一般国道153号座光寺バイパス建設に伴う発掘調査が、当飯田市教育委員会によって行われた。その結果、恒川遺跡群(注５)は多岐にわたる遺跡の密集地であり、かつ、重要遺構、遺物の出土があり古代伊那郡の推定「郡衙」の一画として注目された。

昭和57年度から、国庫補助事業として恒川遺跡群範囲確認調査が始まり、平成４年度で11年目に入った。その中心部分はまだ確認には至っていないが更に重要性は増している。

昭和60年(1985)飯田工業高校の移転新築に先立つ、調査が行なわれた石行遺跡(注７)で縄文時代早期から続く埋蔵文化財の姿が確認され、古墳も新井原２・４・５・15・16・17号古墳、高岡４号古墳が調査された。

昭和63(1988)年度には、それ以前のバイパス両側の開発に伴う発掘調査の報告書が発刊(注８)され、バイパス調査の遺構の続きが明確にされた。

平成元年(1989)飯田工業高校の移転新築に伴い、市道の拡幅が行なわれて、高岡３・４号古墳(注9)の調査がされ、続いて平成2年(1990)に、高岡3・4号古墳から約30ｍ東に離れた、新井原18号古墳(注10)が、飯田工業高校々友会館新築に伴って調査された。

平成元年(1989)５月から恒川遺跡群の一角、新屋敷遺跡(注11)、10月からは恒川遺跡田中倉垣外地籍(注12)が開発に伴って調査された。特に後者からは奈良時代奈良三彩系の緑と白の釉薬を使った陶器片が発見された。

以上の地区内における、埋蔵文化財の調査結果のいくつかを踏まえ、地区内の歴史上の変遷を記述すると次のようである。

当地区内において、最初の人々の足跡は、縄文時代早創期の有舌尖頭器の出土例によるが、更に古い旧石器時代から人の住んだ可能性が強い。また、縄文時代においては、その早期から晩期まで途切れることなく、各時代の遺物が、上段・中断の区別なくほぼ全域から発見され、伊那谷全体における座光寺の位置からみても中心的な役割をはたしていたと判断される。

続く、弥生時代においては、地域内において中心的な地であった姿がより明確にとらえられる。それは、弥生時代中期から後期にかけて、恒川式、座光寺原式、中島式と三つの標識遺跡が存在

し、各期の大集落が展開したことで知られる。

古墳時代を代表する古墳を見ると、現存するものは10余りであるが、下伊那史には、古墳総数66基の記録がある。前方後円墳の高岡１号墳（県史跡）を盟主とするが古墳が構築された事実や、その副葬品をはじめとする内容も傑出したものばかりであり、伊那谷の該期を代表する地区のひとつとなっている。

続く、奈良・平安時代においては、当地区が歴史上最も注視されるべき時代といえる。それは、先述した恒川遺跡における、古代伊那郡衙址の存在であり、定額寺院の寂光寺の存在である。この時代、伊那谷の政経の中心であったことはいうまでもなく、さらに、大和朝廷による国政遂行上でも欠くことのできない地であったといえる。平成元年調査の奈良三彩系陶器片の出土で、さらに重要地域の比重が高まったといえる。

次時代の中世以降が、当地区の歴史資料の希薄な時代であり、南本城、北本城の二城があるにもかかわらず、具体的な歴史事実は未解決の状況である。しかし、各所で行なわれている埋蔵文化財の発掘調査において、輸入磁器を含む、他に例のないような優品の出土することが多く、史実には登場しないまでも、当地域において重要な役割をはたしていた地区と推測される。

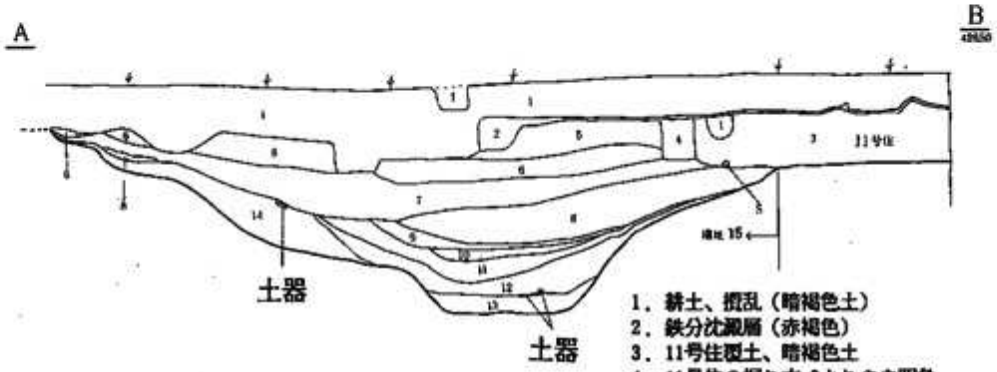
以上のように、各時代それぞれに重要な意味をもつ歴史背景の認められる地区の中に、本恒川Ａ遺跡がある。そこに、古代郡衙址の端部に近い所と想定しているが、今回の調査でその具体的な姿を確認することはできなかった。しかし、153号バイパス調査時に規模が大きく、遺物を多出した恒川Ｂ地籍溝址15（古墳時代前期）の延長部分が調査できたのは、多大な成果であった。

3　層序

層序は（挿図３参照）、調査区によって変っており、区各に記述する。

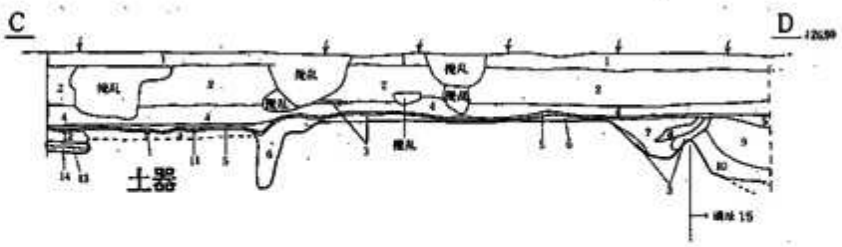
Ａ調査区では、ほとんどが溝址15になる為、自然堆積は地山の黄色砂土のみである。暗褐色の耕土が40cm前後で、その下には調査区の南半分に鉄分沈殿層があり、その部分の上層耕土中には水田が類推できる。沈殿層の認められない所は、深耕が入っている。鉄分沈殿層の下に、11号住居址覆土と、全面的に広がっていたであろう褐色土層がある。褐色土層の下から溝址15の覆土になる。溝址15の掘り方は、西壁縁で地表との差50cm前後であり、この50cmが自然堆積の厚さである。

Ｂ調査区は、東隅に溝址15の壁上縁部と穴、攪乱に切られているだけで、自然堆積がほとんどある。最上部には、市道26号線が舗装の為高くなったのでその時に入れたと云う黄色の山砂が15cmあり、その下に暗褐色の耕土が40cm前後ある。耕土の下に時期は把握できないが、古い水田の灰色粘質土が広がり、下部に鉄分沈殿層がある。その下に黄色砂質土（地山）の変色した漸移層と推測できる淡褐色砂土があり地山になる。



1．耕土、攪乱（暗褐色土）
2．鉄分沈澱層（赤褐色）
3．11号住覆土、暗褐色土
4．11号住の掘り方 3よりやや明色
5．褐色土
溝址15
6．黄色砂混じり褐色土
7．暗褐色土
8．黒色土
9．黒色シルト（泥炭土）
10．灰色泥
11．漆黒色土
12．黄色土混り黒色土
13．黄色砂利
14．黄色砂利混り褐色土

A区　土層図



1．畑に入れた山砂（黄色土）
2．暗褐色土
3．黄色土混り褐色土
4．灰色粘質土
5．鉄分沈澱層
6．褐色土
7．黒褐色土
8．　〃　混り黒色土
9．褐色砂質土
10．炭混り暗褐色土
11．褐色土混り黄色土
12．黄色土混り暗褐色土
13．黄色砂礫混り褐色土
14．黄色土混り黒土

B区　土層図

挿図3　A区・B区（溝址15）土層図

遺構は、鉄分沈澱層を削平した所で検出した。遺物はこの地山直上沈澱層下部からも検出した。

注

1　市村咸人　1955『下伊那史』第2巻　下伊那史編纂委員会

2　今村善興　1967「飯田市座光寺原遺跡」『長野県考古学会誌』4

3　長野県教育委員会　1970「中央道調査報告 ―飯田地区」

4　宮沢恒之　1967「飯田市中島遺跡」『長野県考古学会誌』4

　座光寺考古学研究会　1976「飯田市座光寺中島遺跡の調査報告」『伊那』3

5　飯田市教育委員会　1986『恒川遺跡群』

6　飯田市教育委員会　1982～1990『恒川遺跡群範囲確認調査概報』

7　飯田市教育委員会　報告書年度内刊行予定

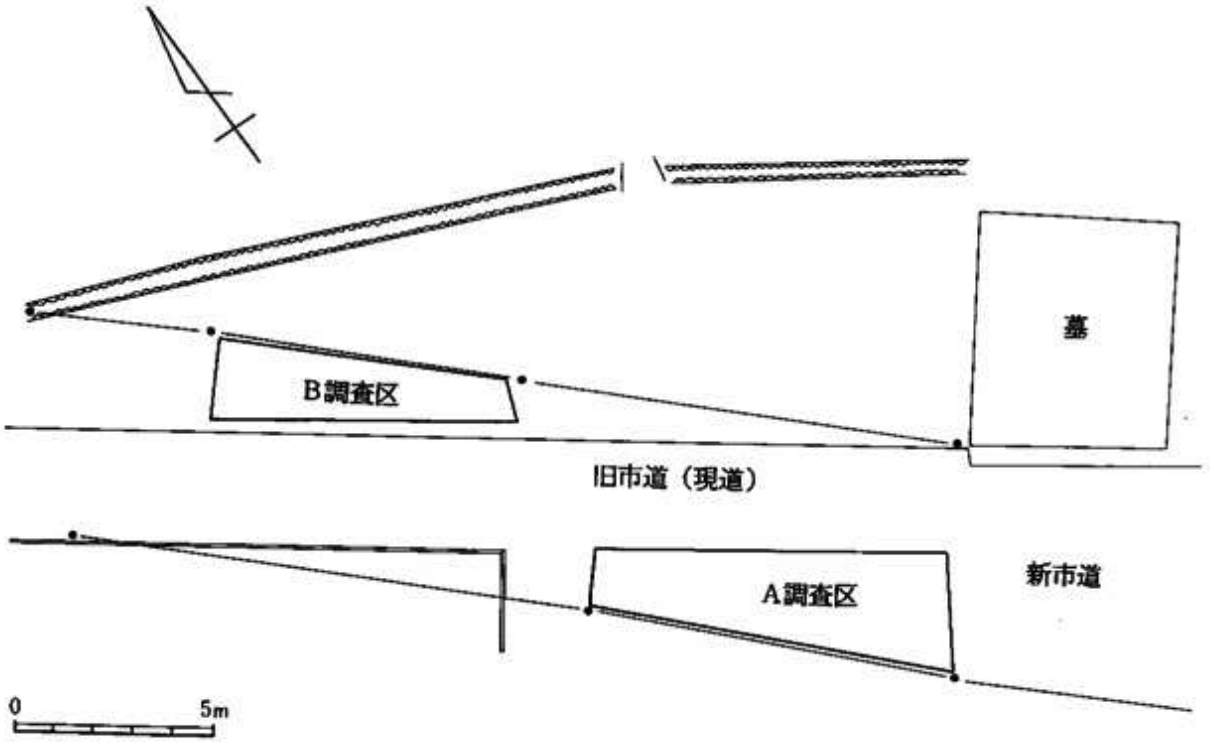
8　飯田市教育委員会　1988『恒川遺跡（田中・倉垣外地籍）』

9　飯田市教育委員会　1990『高岡遺跡（高岡3・4号古墳）』

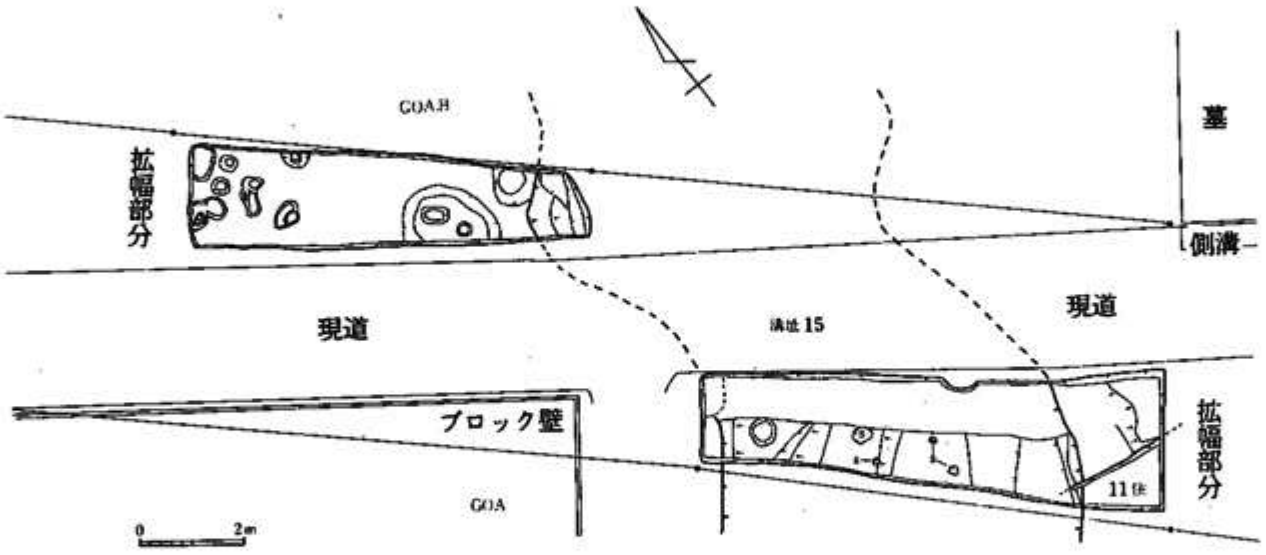
10　飯田市教育委員会　1991『高岡遺跡（新井原18号古墳）』

11　飯田市教育委員会　1991『恒川遺跡群・新屋敷遺跡』

12　飯田市教育委員会　1991『恒川遺跡（田中・倉垣外地籍）』



挿図4　調査区全体図



挿図5　調査区遺構全体図

Ⅲ　調査結果

恒川Ａ遺跡の内市道26号線拡幅部分の調査可能な30㎡余を発掘調査した。現道は使用中であり、それを挟んで両側を調査した。

Ｒ153バイパス調査時に確認した溝址15の延長部が、今回この調査範囲内で確認され、規模・深さを把握できたのは、幸いであった。しかし溝址の深さが現市道から2.5ｍもあり、崩落を考えて底部までの調査が半分になった事は残念であった。

確認した遺構は次の通りである。

住居址	1
溝　址	1
穴	11

1）古墳時代

1．溝址

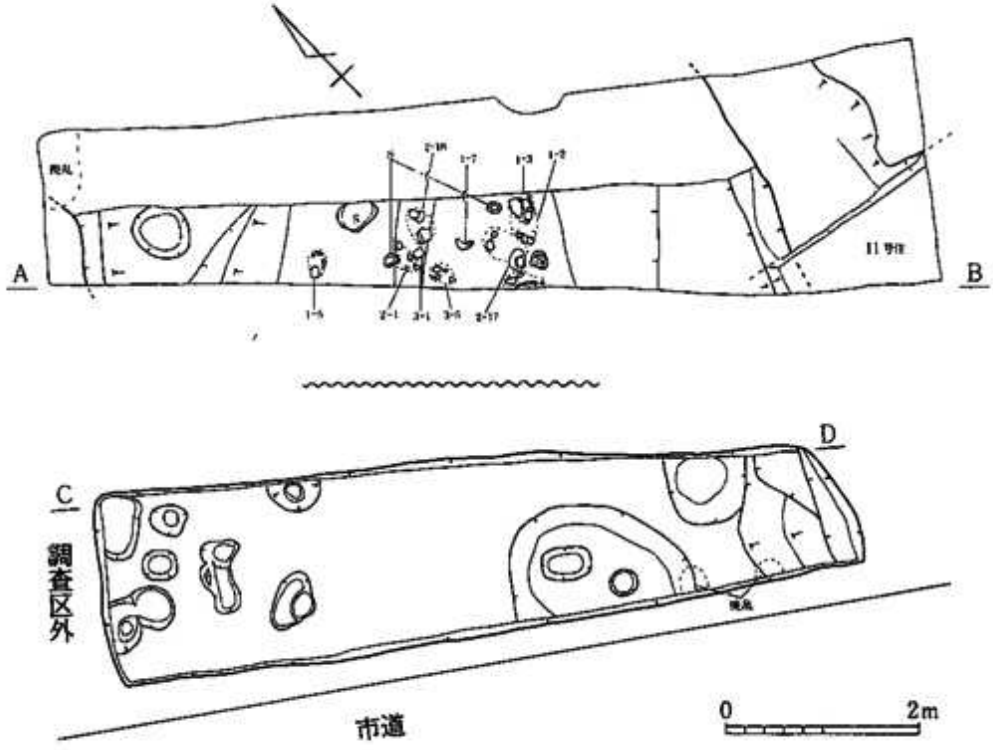
①　溝址15　（挿図６第１～４図）

Ｒ153号バイパス調査時に、恒川Ｂ地籍で用地を横断する溝址を確認、溝址15とした。それの下流部が今回調査により確認された。

Ａ調査区に全体が、Ｂ調査区に上部がかかり、３ｍ強離れて西側上端に差がつく事から、蛇行しているのであろう。

以下に国道バイパス建設に先立つ緊急発掘にかかわる恒川遺構群の報告書の溝址15に関する記述を参考のため掲載する。

遺構　ＧＯＢ・Ａ区とＢ区の境ＡＸ53～ＢＦ45に検出され、26号住居址・溝址６・土坑５に上部を切られ、ＢＣ・Ｄ47には近世～現代の性格不明の方形攪乱坑があり、溝の底部まで達していた。両端は用地外に延び、調査した長さは22ｍ・幅5.6ｍで、用地中程でやや細くなり4.4ｍを測る。全体としては、ゆるやかにＳ字状に蛇行している。検出面からの深さは北側で1.31ｍ・中間で1.43ｍ・南側で1.48ｍを測る。壁は地点により若干の形状差があるが、総体的に東側壁は比較的緩やかで、西側壁は東側に比べ急傾斜である。全体的に緩やかに蛇行することは先記のとおりであるが、細部では各所に差異があり、本溝址の性格等検討する上で意味があると考えるので、特徴的な箇所について南から順記すると以下のようである。



挿図6　溝址15

南端用地境部――溝の最深部が東壁寄りにあり、東壁が他に比べ比較的急傾斜で底に至る。西壁は肩部から急傾斜で落ち込み、一担段を成し緩傾斜で底に続く。

南部――最深部は溝中央付近にあり、西壁及び溝最深部は西方に、突出状を成す。西壁は段状ではあるが急傾斜で底に至る。東壁は本来くの字状に折れ曲がる肩部を削り取った状態で幅２ｍ程のテラス状の緩傾斜面を有し、底に至る。

中央部――溝址全体が逆くの字状におれまがる箇所で、最深部は中央にある。西壁は肩部から１ｍ程緩傾斜面を持ち、その先は一気に底まで落ち込む。東壁は同様に一担稜を有して底に至る。

北部――中央部と北端部の中間辺で、この付近から北側の底は平担な面を成し、水流による抉り込みが少ない。西壁は中央部同様であるが、東壁は肩部から一気に50㎝程掘り込み、一段を有しその後緩傾斜で底に至る。

北端部――溝の最端部は東壁側にあり、底部幅も調査範囲内で最も広い。西壁がいくつかの稜を持ち、徐々に落ち込むのに反し、東壁はわずかに一担稜を有して垂直に近い壁面を成す。

使用時の水流による形状の変化は、底部及び底部に接する壁下部に著しく、原形の判断は困難であるが、基本的には肩部から１～２回程度の段もしくは稜を持って掘り下げ、底部は若干の平担面のある逆台形状の掘り込みが当初の姿であったと考えられる。

全体の緩い蛇行は、肩部の安定した状態から水流等による大きな変化は考えられず、むしろ意図的なものであり、底部付近の水流痕跡から、かなり激しい流れであったと推測され、その勢いを弱める等の目的があったとも考えられる。

本址の覆土は大きく５層に別られる。上から褐色土・黒色土・漆色黒土・褐色土・砂土の順である。（以下１～５層とする）

１層は、場所によって厚薄があり、北端ではほとんど認められず、中央付近で20㎝を測り、南端では26号住居址覆土上面にのっている。このことから古墳時代後期以降の堆積で、溝としての形態をほとんど残していない時期の堆積で、奈良時代以降と考えられる。

２層は、古墳時代後期の堆積で、溝として形をとどめていた最後の時期と考えられる。黒色土が中心で全体としてはゆっくりとした堆積が考えられるが、層内に部分的に砂利が認められ、水流のあったことを示している。１層と２層は平面的には把えられず、遺物が混同してしまい、土師器甕・壺・高坏・天目茶碗・陶器などの破片がある。また、北側では埴輪の破片があり、周辺に古墳の存在も考えられる。

３層は、淡黒色土の単一層で、湛水時の堆積で西壁のほぼ中央部が西へ張り出す箇所に、焼土を確認したが性格等は不明である。この層からの遺物は土師器壺・甕・小形丸底・鉢・高坏などがあり、南端で銅鏃が出土した。出土量は比較的多いが完成品は少なく、層全体に広がっている。古墳時代前期後半の堆積層であろう。

４層は、場所により異なった層状態を示し、かなりの水流があったとみられ、複雑な堆積状態である。西壁側にはわずかではあるが炭の混入する比較的厚い褐色土が確認できる部分もある。

4層の遺物は上層に比べ圧倒的な出土量で、完形品も数多く何個体もまとまって出土する場所もある。調査範囲内で4箇所の集中箇所があり、いずれも西壁側に寄っている。南側用地境に近いＡＸ52・53を中心に壺・甕・台付甕・器台・鉢・手あぶりが出土し、壺や甕は意図的に壊されたような出土状態である。ＡＡ５１の西壁が東へ張り出た部分、3層で焼土を認めた真下から甕・台付甕・Ｓ字状口縁の甕・器台・手づくねなどが重なり合うように出土し、完形品は6個体を数える。さらに、この場所から南側の溝のほぼ中央を1～0.5m置きに用地境まで甕あるいは壺が1個体もしくは台付の甕・器台を伴って出土し、東壁のテラス状に張り出した部分との関連が考えられるが、他の集中部分から出土した土器に比べ破損がひどく、水が流れた時に中央部に押し出された可能性がある。また、この部分から鉄鏃が出土した。ＢＢ48・49を中心とした西壁部は他に比べ広い範囲に出土し極端な集中部を持たないが、台付甕・Ｓ字状口縁の甕を含む甕を主体に、壺・器台・鉢・小型壺・手づくねなどがある。このうち一つの甕の横には長さ35cmの炭化材が伴出した。調査用地北端に当たるＢＤ46・ＢＥ46では口縁の直立する壺が多く、完形品のみで4個を数え、甕・器台などが出土した。ＢＤ46では複数の個体が重なり合って壊れている。径20～30cmの石を抱くように壊れているものもあり、人為的に壊されていたとも考えられる。

5層は本来の溝底部が水流による浸蝕のため凹められ、そこに砂利・黄色土等が入り込んだものと考えられ、遺物は周辺からの流れ込み及び4層遺物の流入の可能性が強い。完形品はなく小型壺・甕・タタキの甕・高坏・弥生時代中～後期土器片などがあり、高坏の量は比較的多い。

遺物出土状況・量などからみて、本溝址がもっとも活発に利用され、存在価値のあったのが4層の時期であり、集落を区切る施設であるとともに祭址的要素がきわめて強い時期で、古墳時代前期恒川Ⅵ・Ⅸ期に位置づく溝址と考えられる。　（佐合英治）

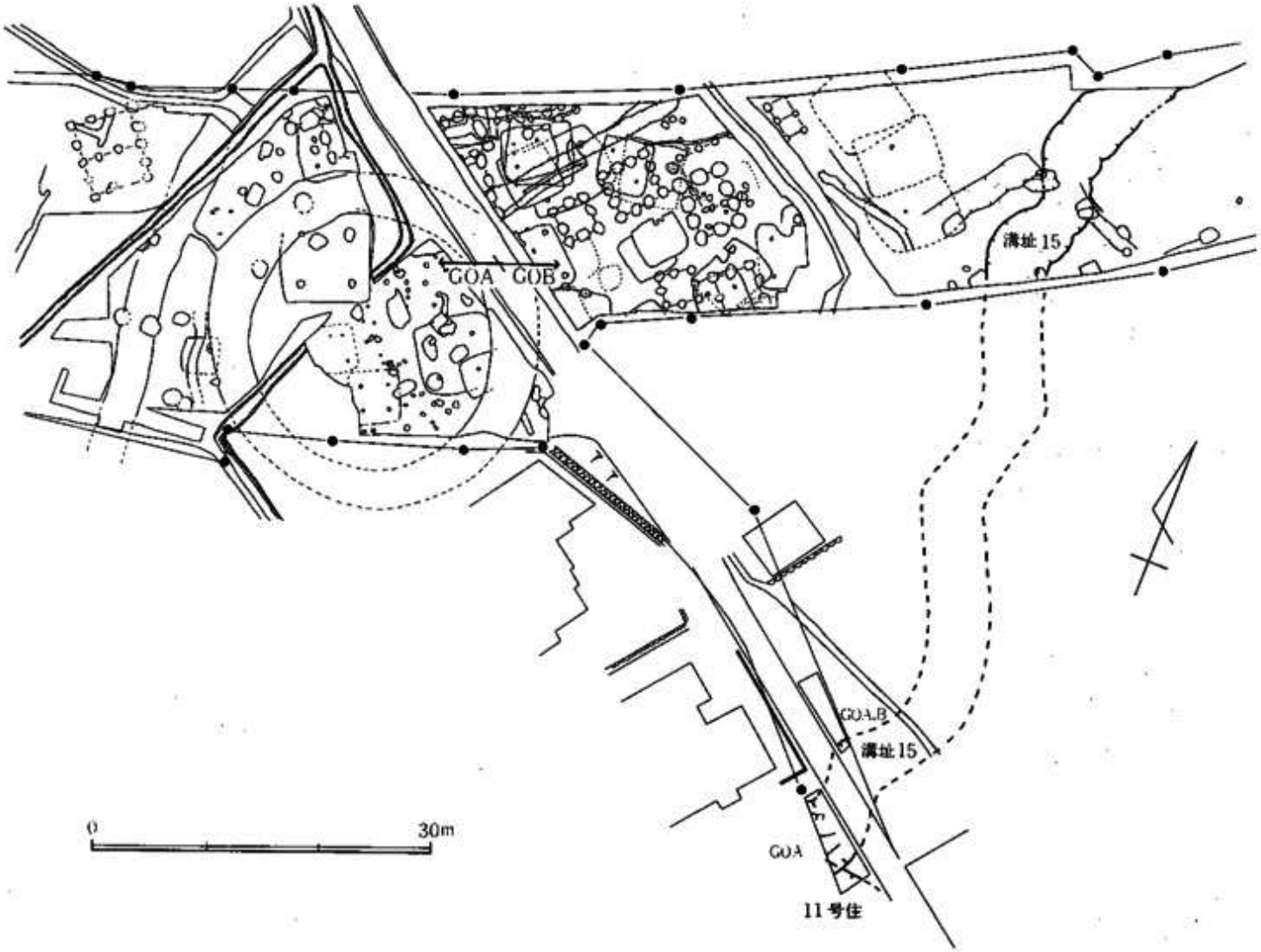
以上がバイパス調査時点に確認した事実であり、それに加え今回の調査では次の諸点を把握することができた。

A調査区は8.7×3～1.6mの範囲であるが、その長さより少し小さい溝址上部幅6.6m、底部の幅1.3mを測る。長さはA調査区1m、B調査区1mを確認した。底部の方位は、A調査区で短いがN45°Eである。深さは東壁で1.6m西壁で1.8mを測る。底部はやや東壁寄りにある。東壁は底部から70cm急に立ち上がり、上端にやや緩い傾斜で続く。西壁には段が2段付き上縁に達する。底部から40cm急に立ち上がり、緩い傾斜で1.5m進み再度傾斜とやや平担な場所があり、急に立って縁部に達する。

土層は、（挿図3参照）レンズ状に堆積しており、底部から2層を除いて、非常に細やかな土で、シルト層もある。

遺物の出土は、漆黒層と同位層から下がほとんどで、最下層の上面が多く、調査範囲が狭い割には遺物量が多い。

遺物は、土師器甕・壺・高坏・石器があり、小破片ではＳ字口縁甕・頸部に凸帯肩部に櫛描文



挿図7　溝址15確認位置図

を持つ壁がある。

今回調査と、バイパス調査時を比較してみると、規模・形態は良く似ているが、下流に位置するためか幅がやや広い。バイパス内で、緩やかに蛇行していたが、A・B調査区を見るとかなり強く蛇行しているのが認められる。

前回の西壁は東壁より急傾斜であり、今回は西壁が緩傾斜であったが、前回の南東用地境では、東壁が急傾斜で底部も寄っている。その南東用地境から今回調査地点まで、東壁が急傾斜であるとは断言できないが、溝址の蛇行と関係が考えられる。西壁は段が付くのと、遺物が非常に多出したがそれと、土層はほぼ同一である。

遺物は、市道ぎわの為調査範囲9×1.5mとわずかであるが、出土遺物は、甕・台付甕・壺・高坏・石器と比較的多い。甕はすべて、漆黒土より下層から出土した。1−2は口唇部を欠くが頸部下はほぼ現存しており、胴部は球状で底部直径8㎝としっかりしている。器面に箆なで痕と推測される刷毛目が残り、その後に雑な横箆磨きを施しており、内面には箆なでの刷毛目が残っている。1−3は胴下部のみの出土であり、上部は推測になるが、胴下部に最大径を持ち底に続く形態から壺の可能性も大である。器面は内外共に雑な箆磨きが施され、輪積の接合面下には櫛目が残っている。1−4は ¼ 現存しており、やや小型で台付であろう。外面上半には櫛目が残るが、下部は雑な縦箆磨きが施され、口縁部は比較的短く、急に外反する。1−5も前の4と同じく小型であるが、胴部の張りが少なく口縁部の大きさ・反りが異る。器面は横なでで、外面には炭化物が付着している。1−6もやや小型で、口縁は立ちぎみに緩く外反する。器面は横なでで、外面には炭化物が付着する。1−7は口縁部の半欠品で口唇部がやや厚くなり、器形は中型以上であろう。現存部には横なでと雑な箆磨き(横)があり、下に櫛目が少量残っている。1−8の現存部は少ないが小型で胴の張りが少なく鉢の可能性もある。口縁部は厚く、緩く外反する。口唇部は指頭で整形し痕跡が残っている。2−1〜4は甕・壺の底部であり、全体形は推測の域を出ないが、1は壺の底部であり、他は甕であろう。2−5〜11はS字口縁の甕であり、外面は櫛目があり、器壁が薄い。8の櫛目は乱れており、浅く施されている。2−12〜15は台付甕の接合部であり、12は胴下部片で台部とは粘土の接合面で剥離している。13は櫛目があり、S字口縁の上部が想定できる。14の実測部は現存しており、胴部とは粘土の接合面で剥離しており、脚の内側は、箆削り後、横なでしている。15の実測部は現存しており、器壁は薄く小型の甕であろう。胴下部内側と台部内側には箆なで痕、台部には輪積痕が明瞭に残り、外面は箆なでを施している。2−16は頸部に刻目の凸帯を持つ壺で拓本の部分のみ出土した。肩部の模様は、凸帯刻目・横線文・波状文・斜走短線が施される。2−17・18は壺のほぼ完型である。17は最大径を胴中央に持ち、底部は丸い。口縁は胴部から、開きぎみに立ちあがり、少し内側に折れて立ち、胴部に比較して厚い。器壁は薄いが小石粒が露出しており、黒褐色を呈する。器面調整は櫛目を持つ箆なでで、外面は雑な磨きが施される。18はやや大形の壺で、最大径を胴下部に持ち、下ぶくれの器形であり底部はあげ底でしっかりしている。口縁はやや大きく立ちぎみに外反する。器面調整は外側箆磨き内側底部に箆磨き

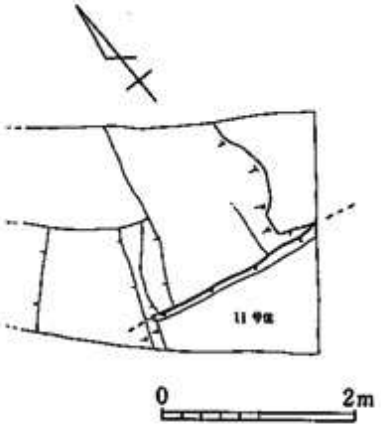
が残り、横なでである。3−1は丸底の壺で、最大径を胴中央に持ちほぼ球形の胴である。口縁は外反し、口唇部に至ってやや内反する。器壁は薄く、胎土に小石粒はほとんど混入せず非常に良好で、良く焼締り褐色から暗褐色を呈する。外面は胴⅔から上方が細かな横磨きであり、胴下部に磨きは無い。内面は横なでである。器形胎土から在地の遺物でなく、東海地方から移入されたものであり、2−17の手本になったものであろう。3−2は小型の鉢で、器壁厚く外面に櫛目の残る篦なでである。3−3は内面黒色であり、鉢と推定したが坏の可能性もある。3−4は3孔の高坏脚部でほぼ現存しており、坏との接合部から外反ぎみに八の字に開く。外面調整は篦磨きで、接合部に近い部分は良く磨かれ、下部に近いほど雑である。内面は篦横なでで櫛目が残る。3−5は3孔の高坏か器台の脚部で、器壁は厚く器台の可能性が大である。3−6〜8は叩きの甕胴部片の拓影である。3−9〜14は混入の縄文中期土器片の拓本で9〜11は口唇部、12〜14は胴部片で13・14は同一個体である。3−15〜20は弥生後期の土器片の実測図と拓影であり、ほとんどが壺片である。4図は溝址15出土の石器で、該期に確実に伴出する遺物は特定できない。

時期は前回と同一内容の出土遺物であり、古墳時代前期の遺構であることをさらに裏付けたといえる。

2）奈良時代

①11号住居址

A調査区南隅に、溝址15を切って検出し、用地外にかかる為2×1.3mの半分を調査した。隅丸方形の竪穴住居址であろうが調査範囲が狭く、規模・主軸方向等不明である。壁高は30〜20cmありほぼ垂直に近い。床面堅く良好で、わずかな凹凸があり、唯一器形の把握できる遺物である須恵器坏は、その凹んだ所から出土した。



挿図8　11号住居址

覆土は用地外壁で見ると、暗褐色土の一層であり、溝址15の覆土を切った状態（挿図8参照）が看取できる。

遺物は第1図1の須恵器坏と土師器片3点である。坏は半分現存し、口径12cm器高3.4cmあり、胎土は小石粒が混るが、良好である。底部は高台が付かず、篦切りで乾燥台の稲科の茎葉痕が少量と、窯印が残っている。ロクロは逆回転で、整形・焼成共に良好である。土師器片は3点共に甕の胴部片である。

時期は、須恵坏の形態から奈良時代である。

3）時期不明

①穴等

A調査区で1個、B調査区で11個の穴を検出し調査したが、いずれの穴からも遺物は出土せず性格は不明である。

A調査区西端近くにあった逆台形の穴は、溝址15の覆土を切って掘り込まれている。直径は50cm前後、深さは検出面から70cmあり、規模は比較的大きい。

B調査区では、10個の穴を検出・調査した。規模に大小があり、掘り方に段が付く物など様々である。調査範囲が狭い為、建物址の柱穴になるものもあると推測できるが、確定はできない。

4）遺構外出土遺物 （第5図）

A・B調査区の遺構外出土遺物は、縄文時代から近世まで出土している。次に図化掲載したものについて若干の説明を加えると、A区出土は1～5・12・13であり、他はB区出土である。1は縄文時代晩期深鉢片、2は弥生時代後期～古墳前期のS字口縁甕の肩部片、3は常滑壺の底部片、4は青磁皿片で表裏に櫛目と片彫が残る。外側下半分は露胎になり、その部分の拓本はきれいに出たが、内側は釉薬が厚く拓影は不可能であった。5は硬砂岩製の敲打器で、周囲には使用痕が残る。

B区出土の6は、ミニチュアの小壺半欠品で、溝址15につくものであろう。口縁部から肩はやや薄く、胴下半は厚い。外側は比較的きれいになでられているが、内側には指頭痕が残る。7は土師質の底部で、あげ底になっており、内外面共にきれいに篦磨きされているが、時期は不明であり中世の遺物の可能性もある。8は灰釉のかかった黄瀬戸の皿で、実測部はほぼ現存している。9～11は鉄釉のかかった摺鉢片で、使用痕の著しいものもあり、中世の所産である。14はほぼ円形をした鉄塊で、銹が厚い。

遺構外遺物は以上であるが、少片はもう少し出土している。中世遺物が主体であるが、R153バイパス調査時にも、恒川Aからは中世遺物が出土し、居館址の存在が考えられた。その東南にあたり、遺物が多くても不思議ではない。

Ⅳ　まとめ

今回発掘調査が実施された恒川A地籍は、恒川遺跡群のほぼ中央に位置する湧水、恒川清水の東約50mにあり、恒川清水の形成する湿地の端部にあたる。市道拡幅部分と云う狭い範囲であったため、以前バイパス調査時に出土した遺構・遺物との関連、今回出土した縄文時代中期土器片～近世陶器を確認したのみで、それらのいくつかを整理しまとめとする。

調査区の微地形は、恒川清水を頂点として、ほぼ三角形に東南～南西へ広がる湿地の東南縁にあたる。調査地点は、湿地が終り段丘を約20m北東に入った所で、緩い傾斜に石垣を入れ畑地になっている。

バイパス調査時には湿地から、住居址・柱痕が残る掘立柱建物址、古墳の周溝、木製品など検出できた。湿地には幾層もの堆積が見られたが、基盤は砂土であり、今回調査地点と色調が異なるが同一の土層といえる。

縄文時代の遺構は検出されず、遺物もわずかであったが出土した。以前の調査でも遺物は出土し、遺構は若干段丘崖寄りに分布すると推測される。

弥生時代の遺構は検出されず、遺物は少量出土した。遺構は以前の調査から周囲に分布するものである。

古墳時代の遺構は、前期の溝址15がA調査区全体から出土した。以前の調査でバイパス用地を横断する事は確認していたが、今回その下流が確認された事で、溝址15の方向がほぼ把握できた。下流の為、幅はやや広くなっているが、規模・土層は共通する。遺物は多く、これも以前の調査と同じであり、性格も集落を区切る施設とされているが、今回調査でもそれを上まわる知見は得られなかった。

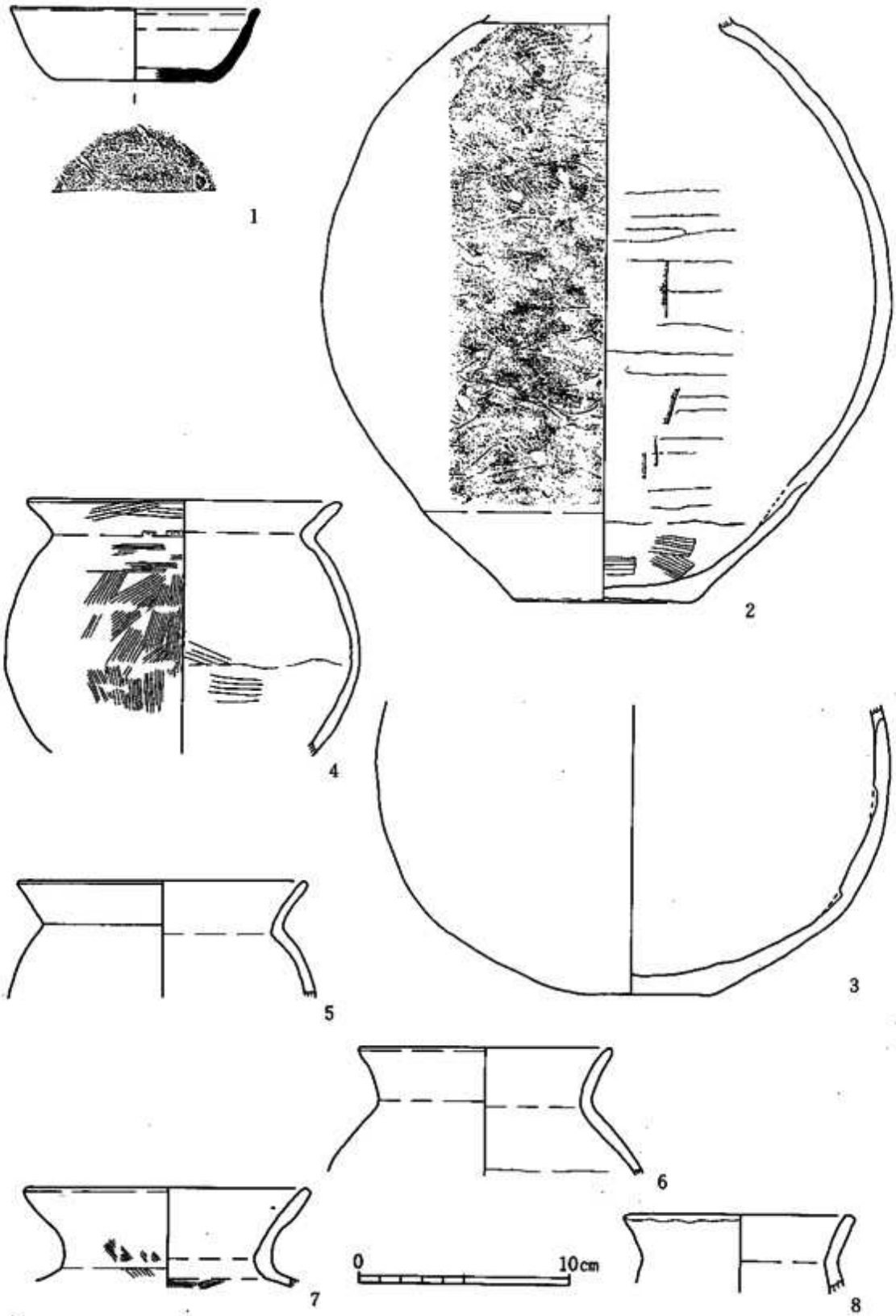
奈良時代の遺構は、住居址1軒が出土した。壁と床面の一部のみの調査であったが須恵器坏の半欠が出土し、時期の特定ができた。以前の調査で住居址は確認されていない。今回調査から西20m余の、柱根の残る掘立柱建物址が、奈良時代官衙域の一画と成されており、今回の住居址も官衙域に含まれる可能性がある。

中～近世の遺構は、平面的に調査しなかったが、両調査区に古い水田があり、時期の特定はできていない。恒川清水の湧水を利用し、湿地の上の乾燥した所に作った水田である。

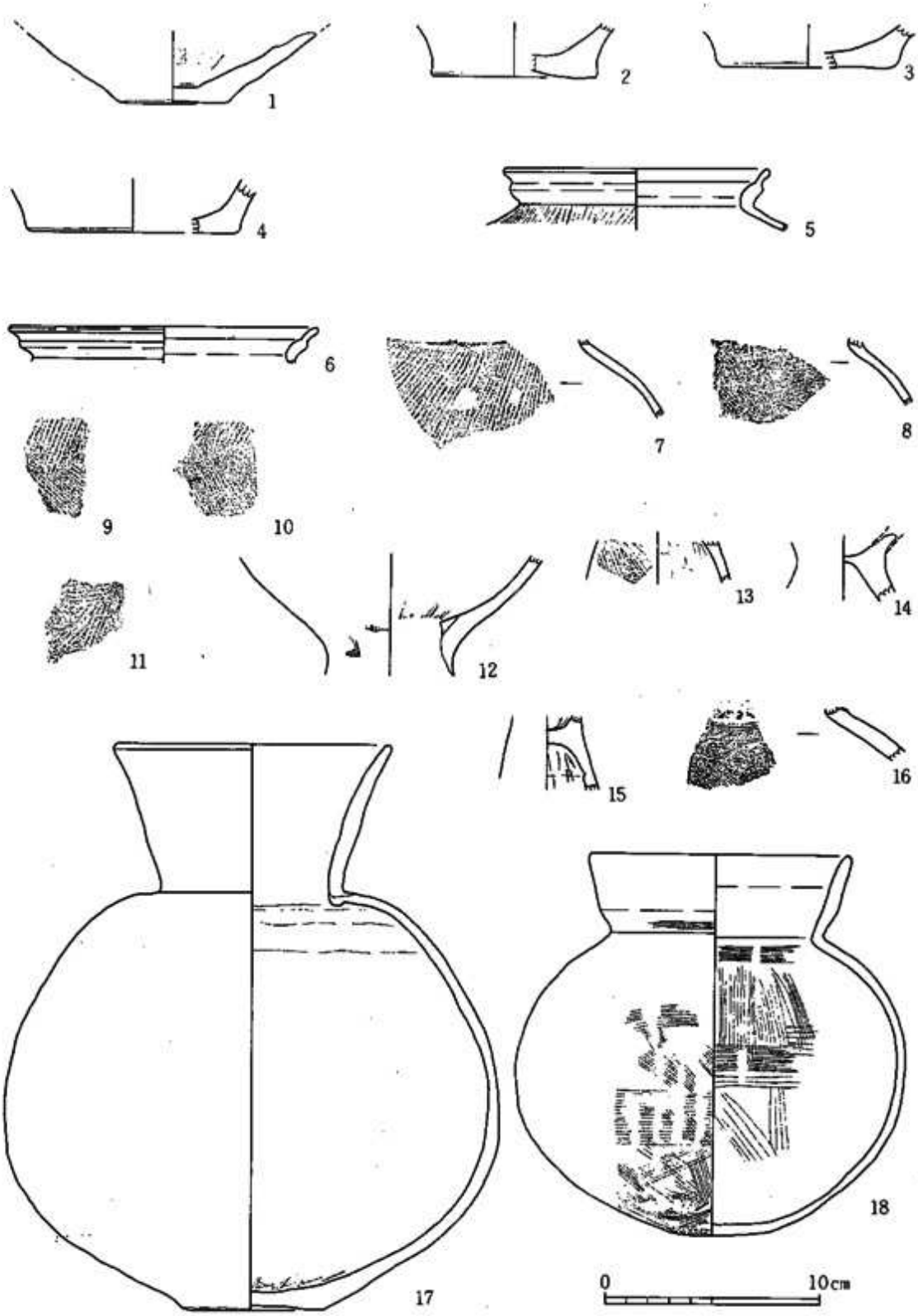
遺物はいずれも小片であるが、青磁皿・天目茶碗・摺鉢・常滑甕等あり、一般庶民の持ち物でない事をうかがわせる。バイパス調査時には、多数の土坑が該期と特定され、有力土豪の居館址・住居址が周辺に存在するものと考えられた。

以上今回の調査結果から、時代別に以前の調査も含めて若干のまとめをしたが、溝址15の先が狭い調査区で規模を確認できたのが特筆される事であり、その方向が把握できた成果は大きい。

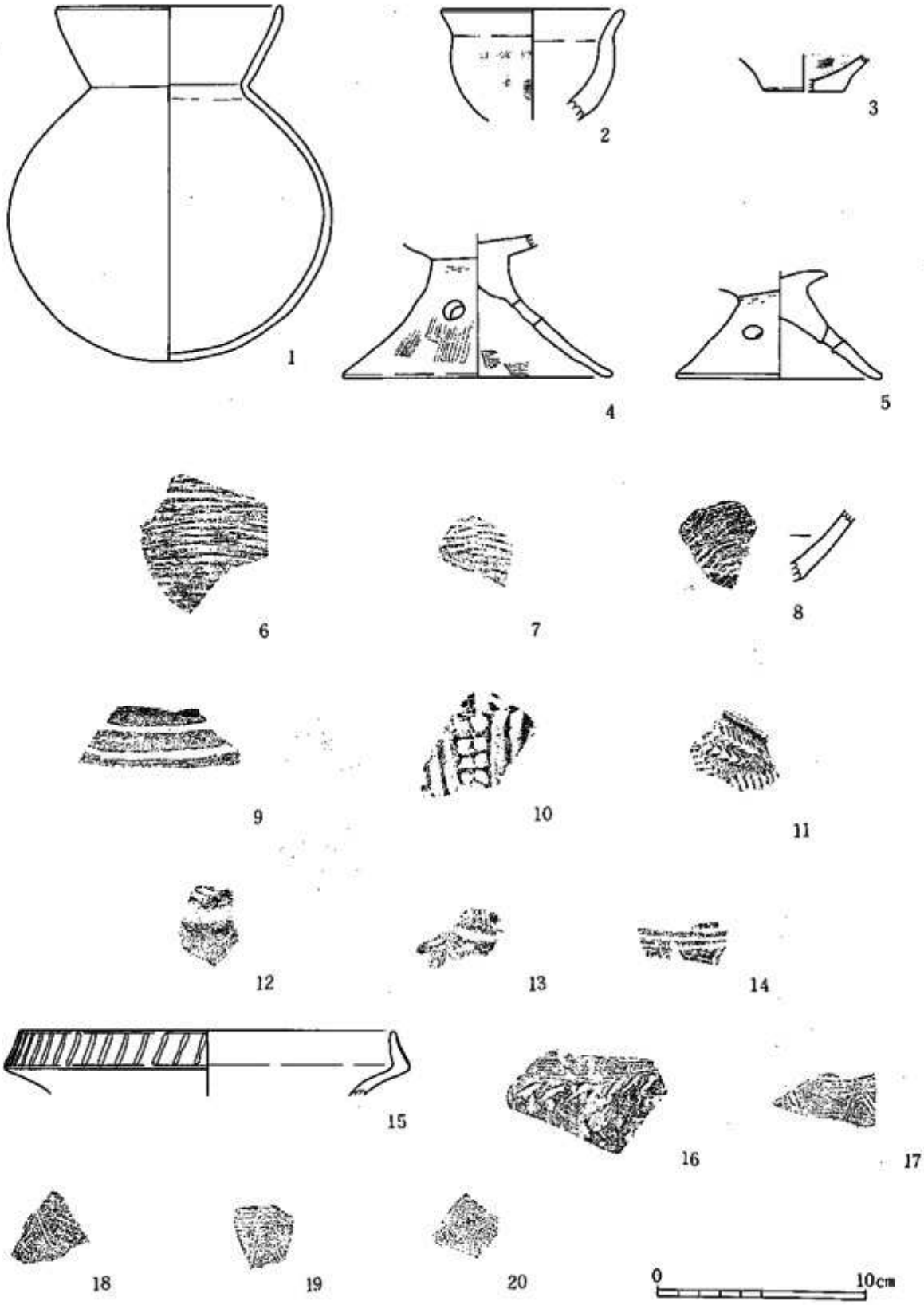
図　　版



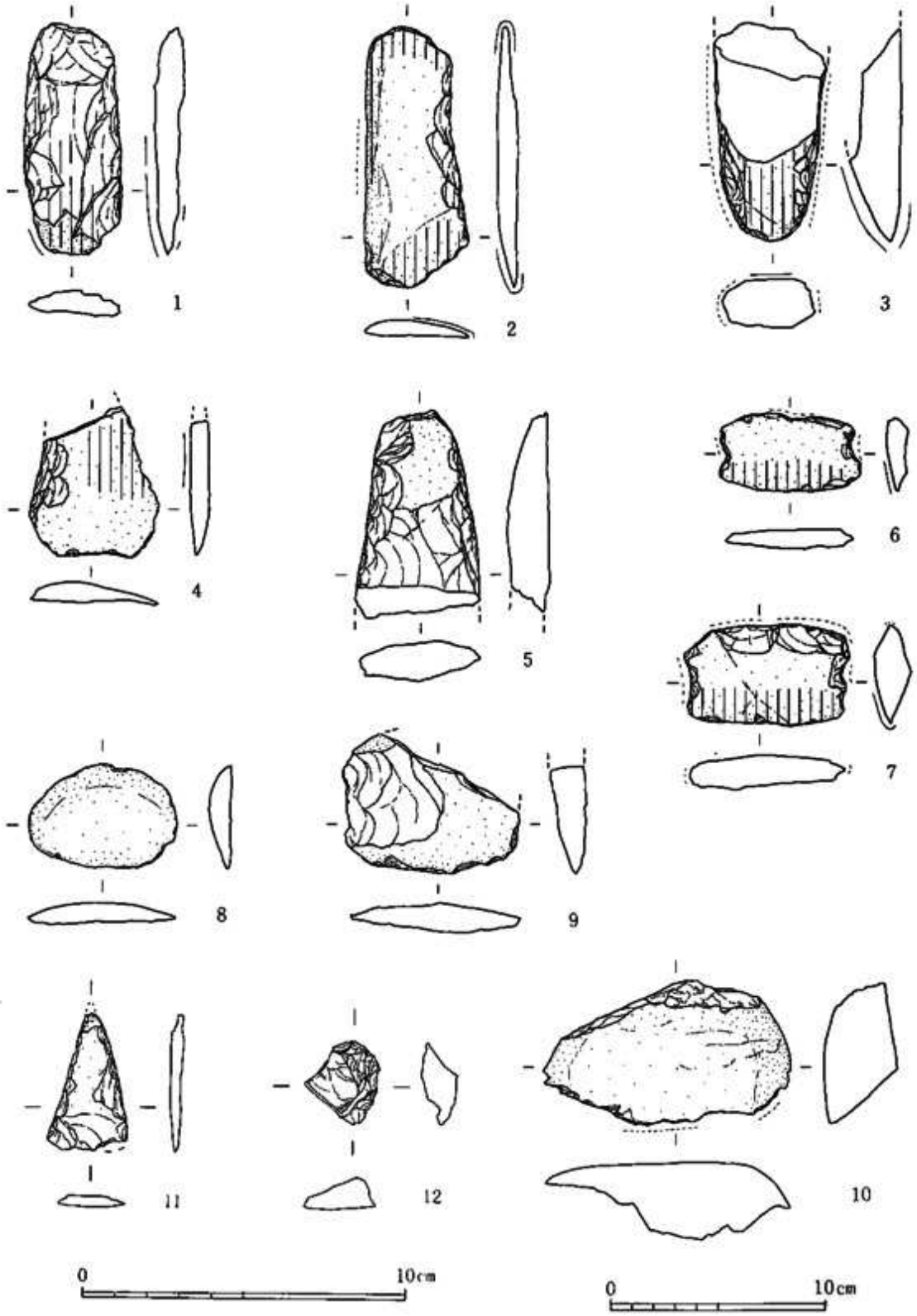
第1図　11号住居址（1）・溝址15（2～8）出土遺物



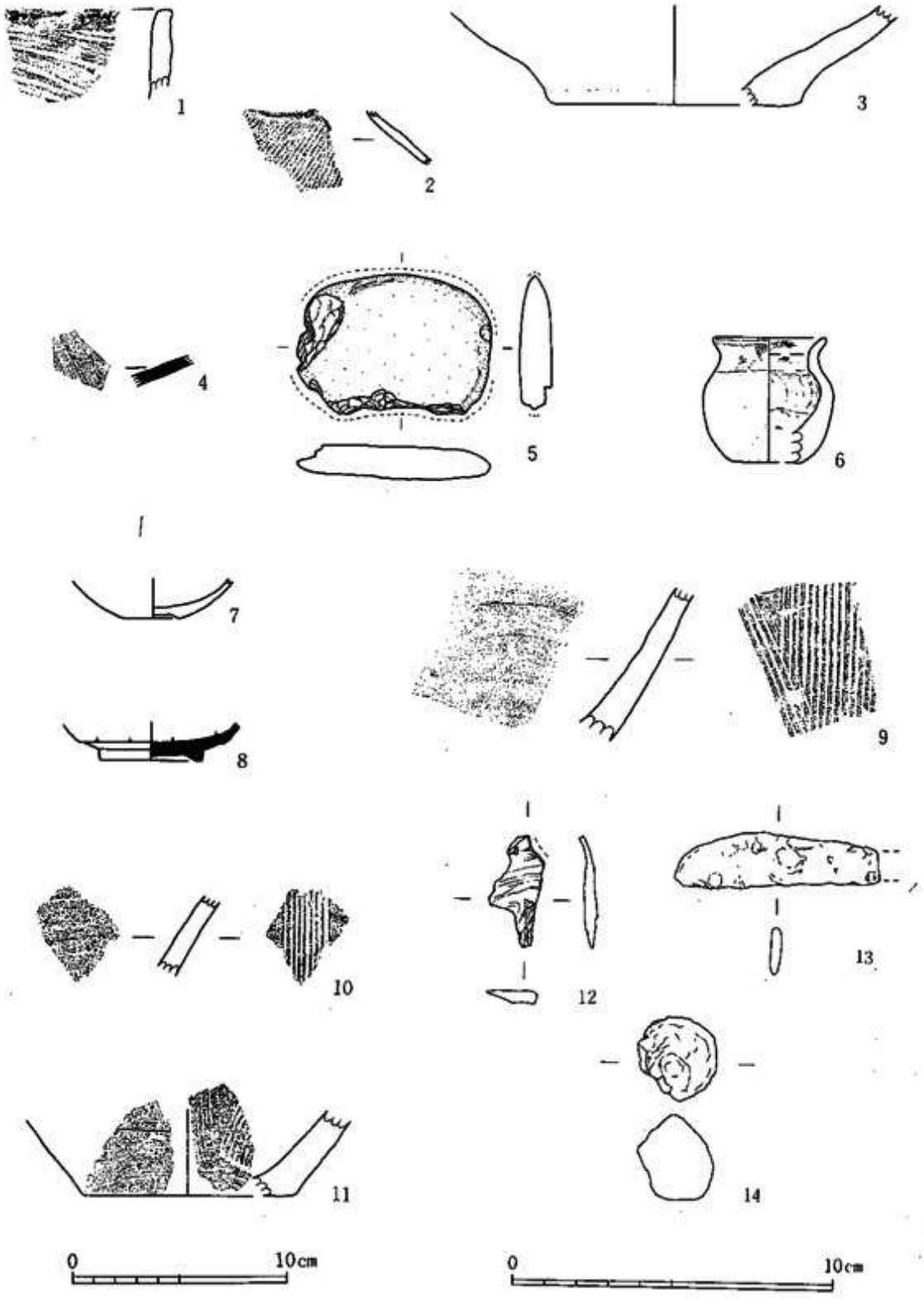
第2図　溝址15出土遺物



第3図　溝址15出土遺物



第4図　溝址15出土遺物



第5図　遺構外出土遺物（A区1～5・12・13、B区6～11・14）

写 真 図 版

図 版 1

恒川A・A調査区調査前　東南から

恒川A・B調査区調査前　西北から

A調査区遺構分布状態　西北から

東南から

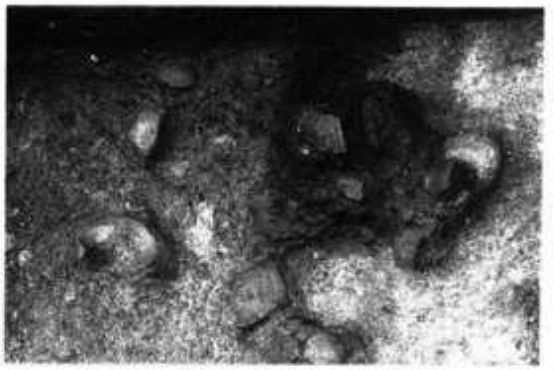
B調査区遺構分布状態

西北から

図 版 3

A区全体　東南から

B区全体　東南から



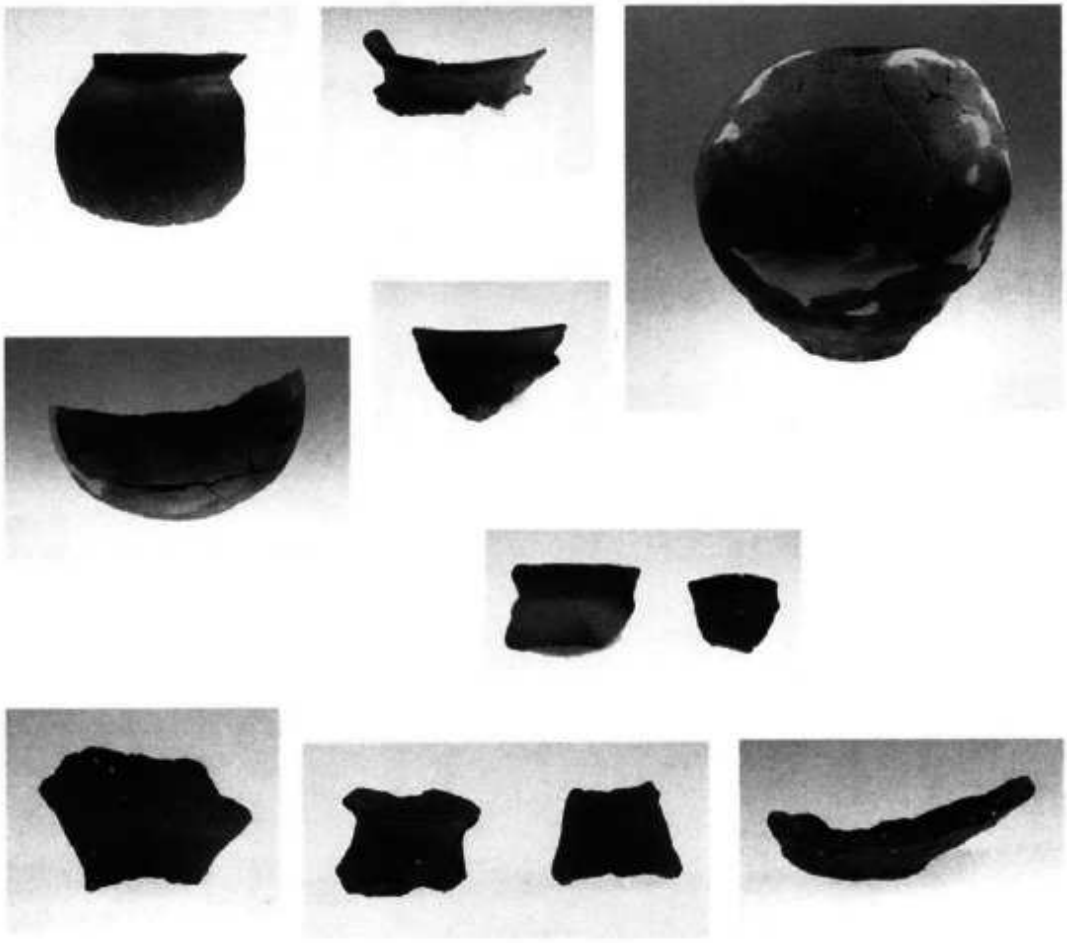
遺物出土状態

溝 址 15

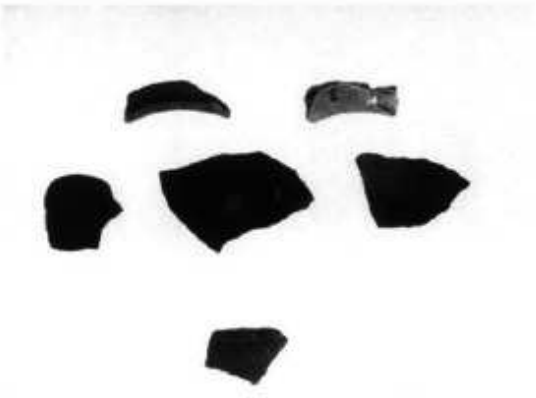
遺物出土状態

11号住居址

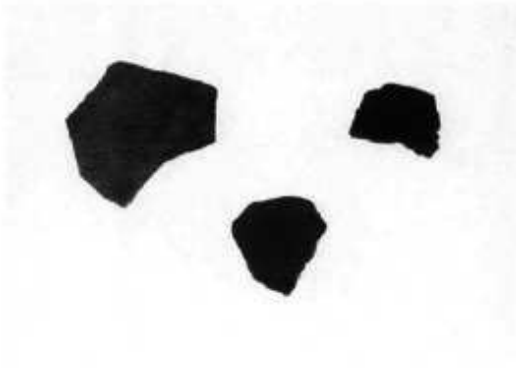
調査部分　東南から



溝 址 15 出 土 遺 物



S字口縁甕



叩き目甕

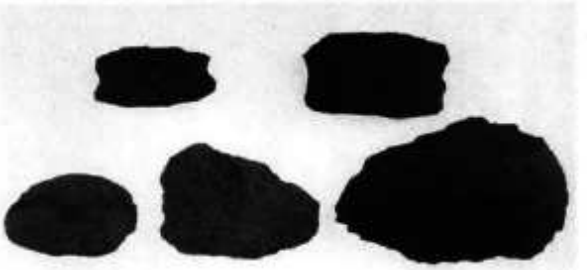
壺

高　坏

縄文時代土器片

弥生時代土器片

溝址15出土遺物

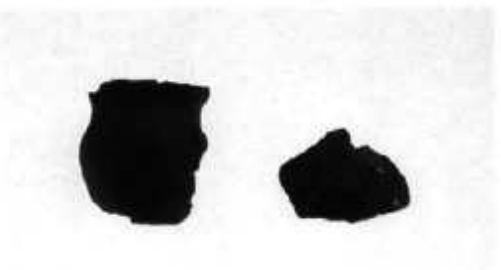


磨製石鏃未製品

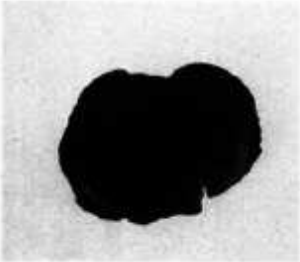
黒曜石片

溝 址 15 出 土 遺 物

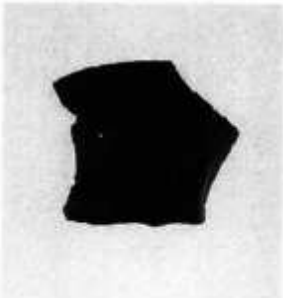
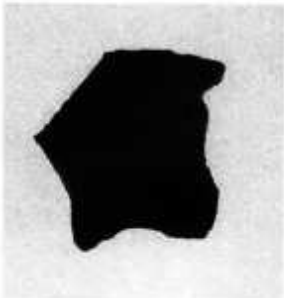
11号住居址出土遺物



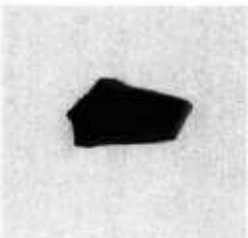
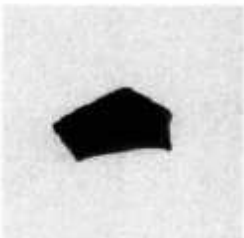
遺 構 外 出 土 遺 物



黄瀬戸皿、表 裏

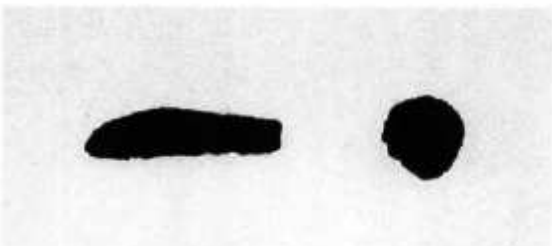



須恵質甕、表 裏

青磁皿、表 裏

黒曜石片



鉄器、鉄塊

遺構外出土遺物

調 査 ス ナ ッ プ

恒 川 遺 跡 群

恒 川 A 地 籍

飯田市座光寺市道26号線拡幅に伴う
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

平成 5年 3月 発行

編集・発行　長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会
印　　刷　　新　葉　社